

美佐屋巻

へ 遠 13

461

1



門 啓
 號 461
 卷 1

自叙

世に於て人情の收樂も人間に於て美味
 ありん故に古今の人達も然り
 氣はあり種々あり
 却て是れ種々あり
 一睡するも夢あり

長嶋町五丁目
 大野 惣八





おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり
おきり



うきものあそび

南田の川

うきものあそび

茶わん

ま乃

かすこ

そり

ら

春情 美佐尾の巻上

江都 八路駒彦戯作

○思ひがら家の騒動も婦人あそ

山鳥のながく一世を送るものゝ哀さの曲者ふはるぞ
 さきとけは者ぞ怒る美婦人後家生娘古きふいたねど
 ひまへふふふんそと愛ひきた家蔵も何れもいふふふふの奴
 ある時ハ朝ハ曉より夜ハお終終の根の續文書ハ物
 ても主ああるらふとやいもせんいふふとふの底の甚所

すまでも男女共々實を土にまき多々香もある。別所の赤穂
との六行國でもまきの花見の酒の席或は雪見の恥の中
て甚寒やうと頼面少と笑ひ。膳不食とて膳不結衣
終解くる泡雪の白きをえがけ人々紫来るるまを促さ
ぬ急路とあると。其時ハおあき神を恨もて月頃目頃
頼もる祖師様を問ひぬのと得る様もある。泣く。六言
席らういふあわびや。且説ふ所の高砂や難波の町不續
たる。人の心も信者の町不住居も廣やうる。一様ある土蔵庫。

角より要折曲。墨板堀の内なる。最良流み松か
枝の外方のうへ延びたる。歳を後ふ福壽屋の住居
とてその初まなる家のうへハ分別の盛もさうなまふ。
老木み登る。山板波さみ腰折。伊勢海老の腰を延て
一間より静み出る店の間へ皺み。髪を引延。丹平。コレ
五市まで丹七の解りあはる。休もく。怪の奴是ぞふ
よ。い。此間見おと相談が極つて。おをさうな極ぐ。流る
ものを是非ともいふまに。行へる。此家のすまひ人。極む

其方の洞と云ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
孫と云ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
一昨夜ある事なす。又二つある事なす。其方
幾日も公卿と云ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
其方嫁孫や其方や家不安定と云ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
酒を飲む事あるべし。又二つある事なす。其方
意然言問甘も皆仇と思ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
目み泪のりこへる事あるべし。又二つある事なす。其方

先より人の怒りて利の當はる事あるべし。又二つある事なす。其方
志く時き一箇と云ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
よりの山後立てて山をみる事あるべし。又二つある事なす。其方
山事表今ある事あるべし。又二つある事なす。其方
むねより山見をこの山と云ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
もねより山見をこの山と云ふ事あるべし。又二つある事なす。其方
丹七の今日より見放今ある事あるべし。又二つある事なす。其方
居を踏まふ事あるべし。又二つある事なす。其方

あるく常を待ておき世に任ふ可きことを
いふ人らと老の怒りも張つて取付たる様
極る先を振拂ひ店屋の方へおき仍れ
鞘の短刀握へて家も刃の未増ゆる時居高き家の
根ををいへてを覗く間ある顔と面
丹七きる 丹一市に面目もある此は合はれ短刀を握りて
肉をさる遊衣とすく曇らぬ此顔の言ひせんと
お侍殿のあつた短刀と云う人々安んじと云う人々
お市に無数のよきものを左に置く様と 今更言て甲斐

なけきと一晩のすく短刀のあつた定例のあつたを
お今にうへてお助當今までおなをふ短刀なら
なにも願言へてお助當の刃のうへおせまゐる此
短刀のあつた入と一旦おへる短刀のすく目をさく短刀
持ていふ様此よる短刀のあつたおのをははの顔も三
度といふ様お言ひを短刀とすく短刀の刃の短刀で
も度々お言ひは方へておのへお言ひの上をさく短刀

やふ見極が。血。秋。三。何。極。ぐ。い。ご。う。と。ま。せ。ふ。り。ん。み。ち。の。を。
思。ふ。り。を。恨。め。い。さ。る。身。の。ふ。り。持。此。を。市。に。懐。小。の。抱。す。を。
見。世。の。用。が。は。ま。る。ふ。り。の。聞。き。い。の。初。此。私。を。私。を。之。
と。は。目。め。く。と。し。く。懐。懐。の。ま。の。路。路。の。下。より。お。る。可。を。
さ。乳。母。の。み。ま。でも。乳。の。み。の。大。群。私。が。の。有。月。務。部。と。を。
を。い。い。の。み。私。が。低。の。此。集。も。自。と。高。く。の。ひ。建。さ。と。感。の。
悪。持。さ。る。ま。の。目。順。自。勝。せ。物。を。用。も。遠。及。と。れ。る。人。
と。真。出。る。乃。の。中。を。こ。の。あ。と。患。病。の。親。に。さ。る。の。子。
と。真。出。る。乃。の。中。を。こ。の。あ。と。患。病。の。親。に。さ。る。の。子。

多。き。を。さ。る。乃。の。中。を。こ。の。あ。と。患。病。の。親。に。さ。る。の。子。
また。貴。つ。と。の。収。め。間。も。なく。ア。梅。松。が。の。血。証。生。目。形。松。の。
猶。の。上。を。目。と。上。る。私。を。其。収。び。の。何。極。ぐ。い。ご。う。と。ま。せ。ふ。り。ん。み。ち。の。を。
ろ。本。を。夜。の。目。も。合。の。候。と。ま。あ。つ。け。と。ア。梅。松。が。の。血。証。生。目。形。松。の。
何。卒。子。依。の。収。目。の。痛。癢。麻。疹。も。様。々。す。と。ま。せ。ふ。り。ん。み。ち。の。を。
早。く。出。人。の。あ。る。ま。り。や。と。病。年。の。あ。る。も。知。し。す。と。ま。せ。ふ。り。ん。み。ち。の。を。
院。の。心。の。ま。が。り。波。う。案。さ。る。も。様。々。す。と。ま。せ。ふ。り。ん。み。ち。の。を。
盛。つ。昨。日。の。ま。す。の。血。証。遠。く。尊。貴。の。ち。さ。ぐ。物。思。ひ。の。こ。

側へ何時の間にか妻を失代も梅松の
携へて此方へと流れてる暇をぬぐひ
然しひとあつたすう常日頃より此様あるを
何と云ふ後を言ふとも情氣を言ふや
べは極ふ四力の毒もあらざう一を情氣懐疑の
人の情も必だ今も嫁入るをうけるに
母を言圖一を言ふ今更ふ力の仇と
太きものまの居るをうけるに
母を言圖一を言ふ今更ふ力の仇と
太きものまの居るをうけるに

流るるまの血氣の時いづる松の影とあまの
一と腰のむねとさうきに流れて元知も
梅こそ親父も母もそんな泣きどと坊と
でも喰ふ其様も流れて坊も怒るうり
あつた初子が親を案するはさう圖の
母のふけ院にあらは漏れ一間より
所ぐと四方見や優々と眼を角の
初めとさうさう流るるに
初めとさうさう流るるに



いふやうな
三つが毒薬丹士を
退んとせう
怒りや
恨みおこ
きあつた

あつて。働者を追ひて。是れ。正直。と。いふ。限。を。あ
か。此。家。の。ま。い。り。に。あ。れ。ば。家。々。が。解。脱。し。て。ア。ラ。う。る。麻。者。の
大。方。の。曲。り。を。上。す。と。い。ふ。は。ま。い。り。の。福。の。神。守。
本。尊。の。目。の。下。に。あ。る。息。の。限。を。さ。る。と。い。ふ。今。う。ら
氣。を。さ。る。と。い。ふ。其。の。麻。者。を。解。を。切。り。限。を。さ。る。と。い。ふ。此。の
考。の。ま。い。り。の。福。の。神。守。の。四。方。の。福。の。神。守。と。い。ふ。白。鳥。を。さ。る。と
遂。に。星。報。の。福。と。い。ふ。人。の。い。う。と。う。か。が。延。び。は。合。世。の
後。の。い。う。と。う。の。福。の。神。守。の。四。方。の。福。の。神。守。と。い。ふ。白。鳥。を。さ。る。と
い。ふ。今。う。ら。氣。を。さ。る。と。い。ふ。其。の。麻。者。を。解。を。切。り。限。を。さ。る。と。い。ふ。此。の

あつて。働者を追ひて。是れ。正直。と。いふ。限。を。あ
か。此。家。の。ま。い。り。に。あ。れ。ば。家。々。が。解。脱。し。て。ア。ラ。う。る。麻。者。の
大。方。の。曲。り。を。上。す。と。い。ふ。は。ま。い。り。の。福。の。神。守。
本。尊。の。目。の。下。に。あ。る。息。の。限。を。さ。る。と。い。ふ。今。う。ら
氣。を。さ。る。と。い。ふ。其。の。麻。者。を。解。を。切。り。限。を。さ。る。と。い。ふ。此。の
考。の。ま。い。り。の。福。の。神。守。の。四。方。の。福。の。神。守。と。い。ふ。白。鳥。を。さ。る。と
遂。に。星。報。の。福。と。い。ふ。人。の。い。う。と。う。か。が。延。び。は。合。世。の
後。の。い。う。と。う。の。福。の。神。守。の。四。方。の。福。の。神。守。と。い。ふ。白。鳥。を。さ。る。と
い。ふ。今。う。ら。氣。を。さ。る。と。い。ふ。其。の。麻。者。を。解。を。切。り。限。を。さ。る。と。い。ふ。此。の

貴様あるさまを側ふえとあるお釈の物も碎るは痛
さをさういふとて眼を閉じても思ひのたやせなく
流る雨粒が血の泪にみえるを見うけてゐる市がそれ
どようよく平ふれ免へたがせと抱き止るを振舞ひこ
ぶ市は母が孫をお預するふつぐ云々。その子母も今
ころよく、何角を敷く（？）と成る後又丹七めのように
働業者なりのあるとは方なるにまゆの多けりお預まを免
うく。角いよりよき老利且ねよう呉ぐと言つけらまでア

[illegible]

修めり。さすりの三番のあぢきなり。いふ
うへ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
修めり。さすりの三番のあぢきなり。いふ
うへ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
かへは脱敷くぞ喜まじき。

春情
美佐尾の巻上

